

もつと様子よく

もつと粹に

もつと着こなし上手になりたい……と、  
願っている貴男へ。

一九九九年に『男のきもの 雑学ノート』を上梓してから、はや四年が経った。この間、  
男たちの「きもの熱」はますますアツク上昇し、あちこちの雑誌特集で「男のきもの」が  
組まれ、呉服店でも男物の品ぞろえが充実してきた。浴衣から入門した男たちも、たちま  
ち渋い紬や御召の魅力に開眼し、羽織紐に凝るようになり、帯や長襦袢を探し歩いている。  
前著のサブタイトル「いつか着たい、そのうち着たい、いますぐ着たい貴男へ。」は、  
もう返上しなければならぬ。そう、「様子よく、粹に、着こなし上手」に邁進する貴男  
へ、ささやかなお手伝いがしたいのである。なぜなら、様子のいい男たちが増えてくれれ  
ば、その「眼福」にあずかれるから。

きもの数寄、着巧者の方たちに登場していただいたのきもの談義は、毎回、一時間をゆ  
うに過ぎ、ときには五時間にも及んだ。男のきものは一〇枚まで、いや、一〇〇枚を着て

はじめて着こなせる……、等々の自説を聞きながら、これから男たちはますます素敵になるとの予感がしきりにした。

きものへの想い、選び方、着方など、いわゆる“きもの思想”は、きものを着る人の数だけある。だから、表面をたどるだけでは本書が矛盾した説を載せていると思われるかもしれない。だが、よく読んでもらえばわかることだけれど、本書のサブタイトル「もつともつと着こなし上手になりたい貴男へ。」精神が、どのページにも通底している。多様性をはらんで、きものはこれからの時代を生き抜いていくのだ。

本書の構成で考慮したことは、どこからでも読めるようにしたこと。目次の項目から、気になるページを開いてもらえばいい。ただ、きもの関連専門用語に関しては、前著『男のきもの雑学ノート』で説明したことが多いので、そちらの参照ページも書いておいた。第一章では、着巧者の方たちに熱く語ってもらった。第二章には常日頃から疑問に思っていたことを、第三章は自慢になる品々の紹介、第四章では、きもの業界に深くかかわっている方たちならではの自説を展開してもらった。

なんといつても、日本人にはきものが似合う。もう民族衣装だから、伝統だから、なんというフレーズを冠する必要はない。ファッションのアイテムとして捉えるような自由さが、これからの“きもの”を豊かにしていくはずである。伝承ではなく伝統とは、革新を含むことなのだから。

今回も編集担当は前著できもの開眼した勝ちちゃんこと長井弘勝さんで、本書は勝ちちゃん

なしでは生まれなかった。編集作業中にふたりできもの談義に耽って進行が遅れることもたびたびだったが、それだけきものは魅力的なのである。撮影は、やはりきもの数奇の吉川信之さん。それに、快く登場してくださった二人の素敵な男たち。加えて、さまざまな匠の技を教えてくれた男たち。名前掲載はやめてよといいいながら、きもの深さを教えてくれた男たち。

みなさんに、心から感謝の気持ち。

二〇〇三年七月

埴 ちと